

演 奏

ピアノ：徳 末 悦 子

(本学教授ーピアノ)

Skriabin: 2 Poems op. 32
 No. 1 Fis \sharp dur No. 2 D \sharp dur
 Rakhmaninov: Preludes op. 32
 No. 12 gis \natural moll

Alexandr Nikolayevitch *Skriabin* (6. Jan. 1872–27. April 1915)

2 *Poems* op. 32

作曲者スクリャピンはモスクーで Taneyev に作曲を, Safonov にピアノを学び, ピアニストとして, ピアノ教師として (1898年よりモスクー音楽院でピアノを教えた。) 活躍したが, 1904年モスクー音楽院の職を辞してからは作曲に専念した。普通1903年の op. 30 のソナタから中期, 1910年の op. 60 プロメテウス (Poème de feu) より後期とするが, この op. 32 の「詩曲」は中期の代表作の一つとされる。

No. 1. Fis \sharp dur Andante cantabile

Fis \sharp dur の和音がはっきり聞かれるわけでないが, 調の意識は十分である。ABA'B' の構造を持ち, AとBはまずリズムが対照的である。Aにおいては主旋律がまず Fis を中心とする和音の上で, ついでHを中心とする和音の上で示される。Bはブルドン cis によって一貫されている。こうして, 基本的な T-S-D の進行が忠実に守られている。A' は, 旋律素材的に, 和音的にAと同一である。B' はトニカ fis ブルドンに一貫されている。

No. 2 D \sharp dur Allegro con eleganza, con fiducia

AA' の二部構造を持つ。各部はそれぞれ主旋律の発展的拡大であるが, A' もまた, Aの拡大である。Aにおいて, 減4度の Ges への転調が聞かれる。

Sergey Vassilievitch *Rakhmaninov* (1. April 1873–28. Mar. 1943)

13 *Preludes* op. 32 より, No. 12.

ラフマニノフは9才でサン・ペテルブールのコンセルバトワールに入学, ピアノを学び, 1885年にはモスクーのコンセルバトワールに転じ, ピアノを Zverev や Siloti に, 作曲や理論を Taneyev や Arensky に学んだ。彼はこの op. 32 の13曲のプレリユード (1910年) の他に, op. 23 の 10 Preludes (1904) を書いている。よく知られた嬰ハ短調の前奏曲は, 彼が1892年19才の時に作曲した op. 3 の 5 Morceaux de fantaisie (Élégie, Prélude, Mélodie, Polichinelle, Sérénade) の一曲である。

No. 12 gis \natural moll, Allegro

構成は簡単で, わずかに, 中間ドミナントの部分を持つことによって ABA の形式となるが, その構成を支える土台は, 旋律美である。

(馬 淵 記)